HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | 陶淵明の隠逸詩とその思想 [論文内容及び審査の要旨] |
| Author(s) | 熊, 征 |
| Citation | 北海道大学. 博士(文学) 甲第15526号 |
| Issue Date | 2023-03-23 |
| Doc URL | http://hdl.handle.net/2115/89376 |
| Rights(URL) | https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/ |
| Type | theses (doctoral - abstract and summary of review) |
| Additional Information | There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL. |
| File Information | Zheng_Xiong_review.pdf (審査の要旨) |

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

# 学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　熊　　征

| | | | |
|---|---|---|---|
| 審査委員 | 主査 | 教　授 | 近 藤　浩 之 |
| | 副査 | 教　授 | 弛　　和 順 |
| | 副査 | 准教授 | 林 寺　正 俊 |
| | 副査 | 特任教授 | 武 田　雅 哉 |

学位論文題名
陶淵明の隠逸詩とその思想

**・当該研究領域における本論文の研究成果**

本論文では、陶淵明の隠逸詩について、思想・文学・歴史・宗教など多方面から研究し、隠逸詩人としての陶淵明の独創性（独特性）の本質に迫り、その特徴を鮮明に描き出すことに成功している。とりわけ以下の四点は、陶淵明研究における新しくユニークな観点と方法によるものとして非常に高く評価できる。

①中国の隠逸思想の淵源を整理してその源と流れの中に、楊朱思想という拠り所を設定して論じるという手法によって、陶淵明という詩人の存在を鮮やかに浮上させ、隠逸詩人研究の新しい局面を切り拓いたこと。

②ほぼ同時代に隠逸を志向した別の二人の詩人､湛方生と江淹の生き様との比較を通して、陶淵明の隠逸詩人としての気質の特徴を描き出し、さらに、それらの分析が詩人相互の作品評価や人物評価に関連し影響していくことを示していること。

③陶淵明の詩文に対する評価は、その死後百三十余年間の南北朝時代において総じて低調であったとされる。しかし、当時の文壇の評者である顔延之、鍾嶸、江淹、蕭統、蕭綱などについて、政治的立場や文壇的立場、「文」と「質」との重視傾向、批評の仕方や状況、社会の一般風潮と個人的愛好との相違、人物評価と作品評価の混交と区別など、その評価基準や要因を丹念に腑分けして、陶淵明に対する評価の実態をこれほど実証的にダイナミックに論じた研究はなく、実は六朝期における陶淵明評価の諸相の中に、その詩文の真価が唐代以降に認められる条件がすでに備わっていたという事実を解明したこと。

④陶淵明の隠逸文学の表現における「門」のイメージに注目し、「門」と隠逸とが密接に関連付けられていること、また、その後世の詩文における隠逸空間の表現に与えた影響を明らかにしたこと。

なお、第二章第一節は「陶淵明の死生観における楊朱思想の受容について」と題して『日本中国学会報』第七十四集（2022 年）に掲載され高い評価を得ている。同第二節は「陶淵明の隠逸思想における楊朱の存在について」と題して『中国哲学』第 50 号（北海道大学中国哲学会、2023 年）掲載予定である。また、第三章は「『詩品』と「雑体詩」における陶淵明――「中品」という評価をめぐって」と題して『北海道大学大学院文学研究科研究論集』第 18 号（北海道大学大学院文学研究科、2018 年）に、第四章第一節は「湛方生の隠逸思想について――陶淵明との関わり」と題して『中国哲学』第 47 号（2019 年）に、同

第二節は「江淹の隠逸思想について――陶淵明との関わり」と題して『中国哲学』第 45・46 合併号【論考篇】（2018 年）に掲載済みである。さらに、第五章第一節は「陶淵明の詩文における「門」のイメージについて――阮籍「詠懐詩」との比較を中心に」と題して『中国文史論叢』第 16 号（中国文史研究会、2020 年）に、同第二節は「陶淵明の詩文における「美色」について」と題して『研究論集』第 22 号（北海道大学大学院文学院、2023 年）に掲載済みである。序論、第一章、結論は書き下ろしであるが、特に第一章は、中国の隠逸思想の淵源を整理して儒家や道家における隠逸的な考え方の特徴を考察した上で楊朱の隠逸思想を思想史的に位置付ける論文として発表すべき価値がある。

附言すれば、比較的早く（2018・2019 年）に発表された、第三章と第四章を構成する三つの論文の中核的内容は修士論文（2019 年度）に由来するが、その内容により第 6 回中村元東洋思想文化賞優秀賞（2020 年）を受賞してすでに極めて高い評価を得ている。にもかかわらず、博士論文を構成するにあたり改めて大幅に増補し修正を施しているのに加え、ほかの章でも初出の論文を積極的に増補し修正している。より深い考究とより高い水準を求め続けるあくなき好奇心と一途な研究欲の現れであろう。

**・学位授与に関する委員会の所見**

審査の過程において、仏教典籍の引用が標準的でないこと、漢文訓読の仮名遣いが一部不統一であること、また、原文に無い「美色」という概念用語の説明がやや不足し、超俗性や高潔さを強調するあまり「閑情賦」の扇情的な表現への考察が十分でない等の指摘がなされた。これらの問題点はほぼ容易に修正し得るもので、本論文の画期的で大きな成果に比すれば、些細な瑕疵に過ぎず、本論文の価値を本質的に損なうものではない。陶淵明研究の新しい方向性を示し､方法や観点を革新するような成果であることに変わりはない。

以上に基づき本審査委員会は、本論文に示された申請者の研究成果を高く評価し、全員一致で本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものであるとの結論に達した。